TOKAI WAKASHACHI

わかしゃち

題字／22回生　水谷　昭

創刊号　1997・5

土佐中・高同窓会・東海支部会報
編集人／35回生　内田順子
〒460　名古屋市中区正木3丁目13－13　コスモホーム　気付
TEL　052－332－3370
FAX　052－332－3372

発刊にあたって

支部長　二十八回生
松崎　正雄

懸案でありました支部の会報を『わかしゃち』と名づけて、このたび、刊行の運びとなりました。

『わかしゃち』が、会員相互の情報交換の場にとどまらず、母校をはじめ同窓会本・支部との交流のなかで、とかく、情報発信の点で見劣りした当支部の状況が、かなり詳しくお伝えできるものと、大変うれしく思っています。

ささやかなものですが、皆様方のいっそうのお力添えをお願い申しあげます。

私は、幸い、当支部の誕生から今日まで、常にかかわりをもってきた者の一人ですので、この場をお借りして、その生い立ちについて触れてみたいと思います。

私が、当時、《青年都市》とうたわれ、元気いっぱいだったこの名古屋に住みついたのは、昭和三十四年の伊勢湾台風襲来の年でした。

大都市といっても名古屋には、東京や関西圏と違って、気を許し合える同郷同学の友人は意外に少なく、ひとしお孤独感を味わったのも私だけではなかったと思います。

同学年だけで集まることはままなりませんでした。

昭和三十年代も終わる頃、今は亡き医師の生野先輩（十回生）を会長格に、自然にグループができ、名古屋～高知の航空便もまだない時代のことで、遠い郷里を偲びながら、土佐酒に浸ったものでした。これが当支部のルーツではないかと思います。

それから、この地に住みついた私どもが世話役となって徐々にメンバーの輪を広げ、任意加入の《名古屋土佐高くらぶ》を旗揚げしたのが、昭和四十五年のことでした。

その後、本部のご指導もあり《同窓会東海支部》としてあらためてスタートしたのが平成元年のことでした。

現在、支部の主な行事としては五月と十一月の懇親会です。春の会には、縁あって当地の大学に入学した後輩諸君を大勢招いて、先輩との絆が緊密になるようなアットホームな懇親会にしていきたいと考えています。

ところで、私が、男女共学第一回生として、土佐中の門をくぐったのは、ちょうど五十年前のことになります。

第二次世界大戦終結直後のわが国の学校教育制度の大変革のうねりのなかで、《小学区制による新制高校全員入学制》を打ち出した高知県の教育界に不安をもった父兄の、土佐中・高への期待が、いやがうえにも高まった時期でありました。

大嶋光次校長先生を先頭に諸先生がたによる、気迫に満ちた熱心なご指導があって、すばらしい教育環境となって結実し、そのなかで、いちずに過ごさせてもらった六年間を顧みると、ただただ感謝の念でいっぱいです。

終わりになりましたが、私は、支部の発展のために、今後とも微力を尽くしてまいる所存であります。母校をはじめ、同窓会本・支部および関係の方々におかれましては、今まで以上のご声援を当支部にお寄せくださいますようお願い申しあげ、発刊のごあいさつといたします。

（名古屋市国際展示場館長）

ごあいさつ

学務報告を兼ねて

学校長　森田（もりた）　幸雄（さちお）

二月は逃げる、のことわざのとおり、あと数日もすれば早くも弥生、桜の季節の到来です。

さて日頃会員諸兄姉には、本校教育振興のため何かとご支援をいただき、心から御礼を申し上げます。

またこの度は、会員各位の素晴らしいチームワークの賜物である会報『わかしゃち』刊行のご連絡をいただき、心からお喜びを申し上げます。

願わくは、関東支部の『筆山』関西支部の『なんぷう』広島支部の『青春』と並ぶ、同窓会情報発信基地として、充実発展を遂げられますよう期待いたしております。

次に今学期の主だった学校行事についてご報告いたします。

去る一月三十一日、第七十二回高校卒業式が、南国土佐にしては珍しい雪化粧の中、町田同窓会長殿にもご臨席いただき、盛大且つ厳粛に挙行されました。

男子百八十三名女子百十四名計二百九十七名の、新しい同窓会員の誕生です。先輩各位の、温かいご指導とお引き立てを、ねがう次第であります。

現在、ほとんどの者が入試に挑戦中ですが、現時点（二月二十七日）で判明した成果は、立命館大二十八、新設の高知工科大二十四、関西大二十、慶応大十一等々であり、貴地関係では愛知医大（医）一、名古屋大（法）一となっています。

今後の国公立後期試験の結

果を祈る思いで待っているところです。

また二月二十日から、三泊四日の日程で高一生のスキー研修が実施されました。長野県菅平では、昨年に続き二度目の集団宿泊訓練であり、二月二十三日無事修了することができました。往復とも名古屋経由の旅程であり、今後お世話になることもあろうかと存じますが、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

このほか、二年に一度の向陽祭（文化祭）、高校入試等大きな行事が続きましたが、生徒諸君の積極的な協力も得て、現在まで無事執行消化することができました。

以上取りあえず学務報告に代えさせていただきます。

寒暖なお不定のみぎり、会員諸兄姉のご健勝と、東海支部のいっそうのご発展をお祈り申し上げます。

（平成九年二月二十七日）

わかしゃち発刊を祝し

同窓会会長　十六回生
町田　守正

土佐は僻陬（へきすう）の地にありながら、山を越え海を渡って、日本全国さらに世界とのかかわりの歴史をもっています。

わが母校も、開校より七十七年、一万五千の卒業生を世に送り出してきました。今や地球規模でそれぞれの活動を展開しています。

特に関東、東海、関西、山陽、四国は高松で同窓会支部を組織し、そこを拠点に、同窓相睦み、相励ましつつ、学びまた活躍しています。

この度私の町に、高知工科大学が開学しました。岐阜県ご出身の、前の東京工大学長末松安晴先生を学長に、システム工学を基調とする最もユニークな、公設民営の大学であります。

この大学設立には、わが同窓、宮地貫一氏（二十一回）岡村甫氏（三十二回）はじめ森下巌氏（二十八回）公文俊平氏（二十八回）らが大きく貢献し、三十回生福富兀氏は教授に就任されます。

地元にあって、このような同窓の活動をみて、喜びと感謝を深めています。

この大学はそのユニークさが早くも斯界の注目を集め、新時代技術革新の旗手としてはばたくことと期待されています。名古屋大学からも向畑恭男先生が教授に就任されます。

東海地区在住の同窓の皆さんが、機関誌を発行して、その絆をより強めてゆかれることはまことに意義深いことです。

かつて天下を制した織田・豊臣・徳川の故地にあって、学び活躍される土佐高の縁につながる皆さんの存在感が、ますます強められることを心よりお喜び申し上げます。

世紀末、ジャパンペシミズムなどとささやかれる時代に、皆さんがそれぞれの持ち場で、日本の明日を切り開いてゆく役割を担って、活躍発展を遂げてゆかれるよう、そして、母校土佐高校を通じて、郷土への絶えざるエールを送りつづけてくださることを、切にねがってやみません。

同窓会あちこち

本部だより

幹事長　三十四回生
岡内　紀雄

一、平成八年度総会開催

平成八年八月三日（土）午後三時より、高知新阪急ホテルにおいて、東海支部の松崎支部長さん、村山幹事さんをはじめ二百余名の参加を得て総会・記念講演ならびに懇親会が盛大に開催されました。総会では、大久保浩二副幹事長（三十二回）のご尽力によって香川支部が復活したことが報告され、支部長の土田哲也氏（三十二回）にご挨拶をいただきました。香川支部の今後のご発展をお祈りいたします。

記念講演は、二十九回生の泉谷良彦氏（三菱石油株式会社社長）による『石油アラカルト』という演題で、エネルギー資源の現状と課題、原油採掘の仕組みと費用など、石油にまつわるさまざまな興味深いお話をしていただきました。

懇親会は、松浦前校長、森田現校長をはじめ、高崎先生籠尾先生ほか多数の先生方も出席され、野球部OB会のスマートで元気いっぱいの司会進行のもと、和気あいあいのうちに、新旧同袍、杯を交わし、応援歌を合唱して、お開きとなりました。

二、平成九年度総会

今年の総会は、八月二日（土）高知新阪急ホテルにおいて開催いたします。多数のご参加をお待ちしています。

関東支部だより

事務局　四十一回生
鶴和　千秋

東海支部の皆様お元気ですか。このたびは支部会報『わかしゃち』創刊おめでとうございます。水面に跳ねる若々しい銀鱗が、目に見えるようで、すばらしいネーミングですね。

担当幹事の皆さんは大変なご苦労だと思います。皆さんのご努力は、今後、次々と土佐高を卒業し、勇躍東海地区に進出してくる後輩たちにとって、何よりも心強い道標となり、同窓会のさらなる団結と発展の、大いなる力となることでしょう。心より敬意を表します。

こちら関東では、女性だけの同窓による《ハチキン会》の活動が、いよいよ軌道に乗り始めました。昨秋五～六人の集まりで始まったのが、この三月には第三回を迎え、約五十人で六本木のレストランを借り切り、大いに紅い気炎をあげました。

この分では、今に支部長も幹事長もすべて女性で占めてしまいそうな勢いです。千代さん・ねねさんの流れを引く東海地区のハチキンの皆様もぜひ参加して、ますますパワーアップしてください。

ところで、男性も参加できる関東支部総会は、来る五月二十五日（日）、僭越ながら東海支部総会の一週間前に、昨年と同じ渋谷区代々木の《国立オリンピック記念青少年センター》で行ないます。

昨年は、ホヤホヤの同窓生七十回・七十一回生が大挙出席して、まさに〈青春若き血潮がたぎる〉同窓会でした。今年も昨年以上に元気な集まりにしようと、秘策を練っております。大勢のご参加をお待ちしております。

関西支部だより

事務局　二十八回生
竹原　暢子

東海支部だより『わかしゃち』創刊おめでとうございます。これからは『筆山』『わかしゃち』『なんぷう』『青春』と、ほぼ全国に亘って、同窓生の息吹が聞こえてくることになるのですね。とてもうれしいことと思います。

さて、平成八年の関西支部のあゆみをご報告致します。

一、五月『なんぷう』第十六号を発行。震災で一年休刊しましたので、思いもひとしおです。

二、八月三日（土）の本部総会に支部長ほか二名出席。

三、十二月末『なんぷう』第十七号を発行。平成九年の新年パーティのご案内とともに千五百名会員全員と本部・各支部に発送。会員数は常に変動はあるものの、だいたい千五百名が登録されています。

四、平成九年一月二十五日にホテル日航大阪にて新年パーティを開催。橋本大二郎知事ご夫妻のご出席を得て、おおいにもりあがりました。また今回初めてふるさとの産品を賞品とした福引きをしましたところ、出席者一同童心に返り大喜び！　ちなみに賞品を紹介しますと、遠く足摺岬の香りのする〈姫かつお〉の真空パック、土佐特産の虎竹で作った箸置きなど七種類ありました。

ほっと一息ついたところでまた『なんぷう』第十八号の構想を立てねばと思う頃になりました。

振り返りますと、やはり地震の後遺症でしょうか、幹事さんがたもそれぞれの仕事が忙しく、この二年くらい集まりが悪かったように思い、反省をしているところです。

広島支部だより

事務局　三十七回生
小島　康

広島国体、男子駅伝、原爆ドームと宮島が世界文化遺産に登録決定、『毛利元就』放映と、このところ話題豊かな広島から、貴会報『わかしゃち』の発刊をお祝い申しあげます。

わが支部は、山口県も含め百四十数名の会員を有し、毎年一月に総会を開催。出席者は四十名前後です。

「お待たせいたしました。さあ、皆様のお時間でございます」

と今年も、司会者が、乗りに乗って進行させた広島支部名物は、出席者全員がしゃべりたいことをしゃべる〈三分間スピーチ〉です。去年の出来事、今年の抱負、現在の関心事、青春時代の思い出、果ては夫婦喧嘩の続きのようなものまで。

そして今年は新方式を取り入れ、〈ご家族同伴〉としましたところ、愛妻家お二人が夫人を同伴。

またゲストとして、去年から同窓生の溜り場となっている小料理店《梅太郎》のおかみも出席されました。龍馬が終生の恋人、土佐人大好き、いごっそうステキ、はちきんほれぼれ、とおっしゃるおかみの料理は、〈お袋の味〉。ドンと揺るぎない体格でよく笑う。

そんなおかみと、たわいないおしゃべりをし、飲んだり食べたりしながら、ずらりと棚に並んだ焼酎《竜馬》や、狭い店の一角のほとんどを占領しているセピア色の龍馬の写真を、酔眼朦朧と眺めていると、〈あたしもはちきんの端くれ……〉と力が沸いてくる。広島に土佐と土佐人と母

の温もりを見つけたような、そんな〈梅太郎〉です。

年間行事として、八月に〈夏の集い〉という気楽な集まりももっています。参加者は十数名。去年は宮島の史跡を訪ね歩き〈杜の宿〉にて入浴。汗を流した後、昼食談笑となりました。

わが支部の会報は、その名も『青春』。去年七号を発刊しました。

平成十年の総会は一月二十四日（土）です。広島支部の〈三分間スピーチ〉に、おしゃべりにおいでください。

われらわかしゃち

土佐は大声・尾張は小声

三十七回生　南　毅一

尾張名古屋に住んで、十六年。東京・大阪に比べ、小ぢんまりした静かな街だと喜んでいる。道も広くて立派だし高速道路もまず混まない。たまに出張する東京の雑踏や渋滞を見るにつけ、今の名古屋の静けさ・おっとりさを安心する。言葉からして落ち着きがあり、間延びしている。

「おみゃあさあ……、あのよう……」

東京なら張り倒される。

土佐の高知も小ぢんまりとはしているが静かではない。騒々しい。

やはり街並は名古屋がいちばんグッド。楚々とした白い街は、そこに住む名古屋人の人品・骨柄そのままである。なにごとも目立たぬよう、目配り・気配りも抜かりない。土佐人からすると、「なんちゃあじゃない、そんなこんまいことを……」

と軽くすましてしまうことでも、名古屋ではそうはいかない。なかなかしぶとい。

それでもなお迫ると、「解りました。勘考します」と小声で返ってくる。

〈勘考〉なんて言葉は、土佐にはない。辞書では、〈よく考える〉という意味らしいが、名古屋ではだいたい〈ダメ〉ということらしい。

こんなファジーな言い方がじつに多い。徳川中期より、「ノー」と言えなくなった名古屋の歴史がそうさせるのだろうか。なにかあると、すぐ〈断をつめる〉土佐人とは大違いである。

名古屋人の声の小ささも気にかかる。周りが静かなだけに、小さくても充分意志疎通ができるのかもしれない。がわれわれ土佐人の受けた教育はその逆。まず第一に大きな声で返事し、話しすることだった。

土佐中時代の〈数学のカマス〉先生や、〈英語の中澤女史〉先生などからは、勉強を教えてもらったという記憶はあまりない。ただ、叱られ、躾を受けたことはしっかり残っている。だからか私はいまだに声が大きい。地声であるので仕方がないが、こうでないと〈モノ〉を言った気にならない。　それでも私は、土佐弁訛りとこの大声で、この先、名古屋で商売を続ける。決死の覚悟である。

（コスモホーム代表取締役）

夢を語ろう

四十九回生　楠　正隆

十五の春には皆、白線の付いた制服が誇らしく、無限の未来を信じて、両親の期待を背中に受け、校門をくぐりました。

誇り高き土佐高生共通の見果てぬ夢。それは、文系なら東大文Ⅰ、理系なら東大理Ⅲ現役合格。将来は、東大教授か大蔵省事務次官、でした。三年経って、ある者は挫折し、ある者はまだ夢に向かってもがき、全国の大学を受験しておりました。

昭和四十九年一月末の曇天の日、生まれて初めて名古屋という地に降り立ちました。滑り止めと思って受けた大学に、結局四十一歳の今まで勤務しております。

人生の折り返し点を過ぎ、誰一人として同期生中に十五の春の夢をかなえられそうな地位に残っている者はありません。病死した者、自ら死を選んだ者、また幸いにも上場企業の社長となった者。皆、それぞれの人生を精一杯生きぬき、そして今も生きているようです。

十五の春のあの顔を、今でもなつかしく思い出します。同窓会に出て、土佐高生が共通して持っていた夢、そしてその挫折、さらに自分なりの新たな夢、目標をもって精一杯生きてきた今の自分を見せ合い語り合いたい。

同窓会で先輩や後輩を見ることは、ひょっとしたら、第三者として、外から冷静に自分を見ていることかもしれないと感じます。

大先輩のように、だんだん髪が薄くなるだろうかとか、隣の先輩のような白髪かもしれないとか、考えます。

決してノスタルジアだけではありません。自分自身の人生を振り返り、将来を見据えるためにも、出席しているのだと感じます。

同窓会に出てこない方々、ぜひいちど参加していただきたい。

母校土佐高校に提案があります。二十歳代から各世代ごとに最低二名の評議員を選出し、思い切った若返りをはかり、学校機構の改革を行なってほしい。私のようなOBが同じ夢を持った若いOBと出会いつづけられるように。

最後に一言。

私はボケ老人となり、大便小便をたれ流していても、頭の中で、あの十五の春からの土佐高の日々を想い出し、ときどきニッと笑うでしょう。「このじいさん気持ち悪いちゃ。ボケちゅうに、ニタリゆう」という声を聞きながら…。

（愛知医大第一内科講師）

ほやほやですが

七十一回生　澤田　茜

私が高知を離れ、早いものでもう一年。名古屋へ来て、いろんなことに驚きました。その中のいくつかをあげてみようと思います。

まず寒いことです。初めて名古屋へ来たとき、寒さと強風に耐えきれず、上着を買ってしまったほどです。

また、たくさん積もった雪にも驚きました。まさかあんなに多く降るとは、まったく予想していませんでした。南国育ちの私には、やはり雪はめずらしく、感激してしまいました。

食べ物では、〈赤みそ〉に驚きました。みそカツや、みそ煮込みなどの、みそを使った料理にも、驚いてしまいました。私は、みそカツが大好

きです。

驚いたことといえば、もう一つ。それは、中日ドラゴンズに関するニュースが多いことです。星野監督がコマーシャルに出ていたり、なにかとドラゴンズが目につきます。バイト先のおばちゃんたちはもちろん中日ファン。勝つと機嫌がいいのだけれど、負けると不機嫌だったりするんですよ。高知にいたころは、あまり馴染みのなかったドラゴンズ。しかし、名古屋に来ると、やはり気になりますね。完成した名古屋ドームでの試合も楽しみです。

名古屋といえば、やはり大都市。駅で迷い、店で迷い、たいへんでした。初めて来たときのカルチャーショックは大きいものでした。

とはいえ私のいま住んでいるのは知多半島。それも、とってものどかな所です。夏には道路をカニが横切っていたりします。これには別の意味のカルチャーショックを受けました。

大学生活は、のんびり一年が過ぎてしまった、という感じです。高校時代のほうが、毎日忙しく、刺激があったのかもしれません。残りの大学生活も有意義に過ごしたいと思います。

（日本福祉大学・学生）

なごやよいとこいちどはおいで

四十四回生　神宮美恵子

「わかしゃち」発刊おめでとうございます。

高知を出てから二十数年たってしまい、土佐高を意識するのも、同窓会や高校野球などの折に限られてしまっています。

私が名古屋に来て、早いもので十四年になります。名古屋は独特の文化・気質を保っている土地柄で、最初は戸惑うこともありましたが〈住めば都〉で、今ではすっかり名古屋の人になっています。

マスコミなどでからかわれたりして、評判はあまりよくないし、特徴のない町という印象ですが、住み易さという点では、名古屋はなかなかのものです。

文化的・商品的満足度も高いし、町の規模があまり大きくない分、暮らしていて疲れないという〈大いなる田舎〉のよい面も感じます。

それでも私は、名古屋駅や栄の地下街で、いまだに迷ってしまうのですが。

なんと言っても、ここのロケーションのよさは最高。どこへ行くにも便利です。

去年の手帳によると、私の行った地名は次のようです。伊賀上野・室生寺・京都・三方五湖・郡上八幡・高山・開田高原・乗鞍・伊勢志摩・湖東三山など。地名のあとには伊賀牛・刺身・山菜・そば・的矢がきなどと記入してあるのは、〈花より団子〉を実践していたということですね。すべて日帰り可。名古屋を起点にすると、楽しみが広がりますよ。「やっぱり、いっぺん、こなかんわ」。名古屋では、ぜひパルコ西館八階の《ねぼけ》に足を運んでください。東海支部の同窓会でよくお世話になりますが、五十一回生市川（店長）さんが待っていますよ。

（専業主婦・パート）

編集後記　なごや・ん？

編集人自己紹介…自称主婦・自称川柳書き。そこで土佐弁川柳を数句。

・龍馬しかおらんみたいな国自慢
・名古屋にもドームが出来たちやきいよ
・いごっそうばかりの中のイゴッソウ
・豊橋の竹輪でちくと土佐もどき

われら『わかしゃち』元気に誕生しました。今後ともどうぞよろしく。

（内田　順子）